

タイトル 解が一意に定まりません

名前 金沢知夏

学校名 京都美山高等学校

私は、生まれてから今までに経験をしたこと、いろいろなことを記憶している。16年以上の日々を過ごして、たくさんのことを体験してきた。強烈に覚えている記憶から、誰かに言われても思い出すことのできない記憶までさまざまな記憶があるだろう。

その一方で、私たちは、自分が生まれるずっと昔の出来事も記憶として持っている。学校で勉強したり、本で読んだり、テレビで見たり、年上の人から聞いたりなどして体験していないけれど知っている記憶がある。誰かの体験で、自分の体験ではないことをたくさん記憶している。

私は、誰かの体験を記憶することは、歴史を学ぶことに近いのではないかと考える。何年に何が起こった。その出来事、誰かが記憶した出来事をそのとき体験していない自分が記憶している。それが、歴史を学ぶということだと思う。

誰かの記憶を記憶することは、我々にとって良い面がある。過去の失敗や成功から、今の最善策を考え出すことが出来る。その一方で、私は、歴史、つまり、自分以外の誰かの記憶を学ぶことに、恐れを抱く事がある。

それは、今まで生きてきた人々には、その人それぞれの記憶があり、それを全て記憶し学ぶことはできないということ、そして、その記憶から我々は常に正解を見つけ出さないとけないという切迫感があるからである。どこか一つの出来事を切り取っても、それを体験した人全員の記憶を記憶することはできない。誰かにとっては思い出すが辛い悲しい記憶が、また別の誰かにとっては喜ばしい記憶なのかもしれない。そのとき、私はどちらに共感すべきなのだろうか。勝利の記憶と記憶する人もいれば、敗北の記憶と記憶することもできる。その二つの、あるいはもっと多くの記憶たちにはさまれた迷路の中で、さまよっている感覚に陥る。

2025年は、太平洋戦争の終戦から80年という年だった。それは、広島と長崎に原子爆弾が落とされてから、80年経ったとも言える。死者を悼み、二度と戦争を起こさないようにしよう。核兵器は持つてはいけない。さまざまな人の反戦への思いが感じられた年だったと感じる。第2次世界大戦以降に生まれた人が多くを占める日本で、歴史から学んで、戦争はいけないと答えを出す人は多いのではないだろうか。

所属している社会の違いで、学ぶ記憶は変化し、どう学ぶかも変化する。同じ社会にいる人間同士でもそれぞれに歴史を記憶している。大量の死者を出した悲劇の記憶は、抑圧から解放された感動の記憶かもしれない。相手の記憶が自分の記憶と異なっていることは、ごく自然なことだ。しかし、相手の記憶が自分の記憶と異なっているとき、我々はどう行動するか。どちらが正しいかを決めようとするのがよくあるのではないだろうか。そこから争いに発展し、暴力を伴う争いになることもあるのだと思う。

どれが正しいのか、どれが間違っているのか。それを決めなければいけない、決めるべき

であると強制されているように感じる時がある。たくさんの人の記憶で満たされる湖で、正解を求める水草に引っ張られ、沈んでいく気分になる。誰かの記憶を記憶すればするにつれて、また別の視点からの記憶に気づき、考え方の違いに苦しむ。

戦争はいけない。とてもその意見に同意したい。けれども、戦争を続ける社会を、完全に否定することは難しい。どちらが正しいのかを争っている人々に、これが正しいと一つに決める資格が私には無い。戦争をしている人々に、戦争はいけないと声をかける資格も無いだろう。何ができるのか、いや、何もできないという反語の中で考え続ける毎日を過ごしている。